

拠点校名 水戸市立赤塚中学校

連携大学 茨城大学

研究主題 向上心をもって学び合い高め合う生徒の育成

1 主題設定の理由

本校では昨年度、『互いに学び合い高め合う生徒の育成』をテーマに研究に取り組んできた。それに伴い、教科ごとの部員会の中で研究主題に迫るための手立てを話し合ったり、教科ごとの研修会では、7月と12月の授業アンケートをもとに授業改善方法を話し合い、授業を行ったりしてきた。また、昨年度水戸市教育委員会の研究指定を受け、ICT活用に関する調査研究が赤塚中学校区で行われ、義務教育9年間を見通した系統的な情報活用能力の育成に関する研修を行ってきた。これらの成果として、生徒たちは一斉授業の中でもグループ活動においても、互いに学び合うことが増え、さらに、1人1人台端末を活用し学びに向かうことができるようになった。しかし、その一方で、生徒の学校生活の様子から、努力の継続が苦手、自分で考え行動することが苦手、といった実態が見られた。これらのことから、生徒自身が「もっと～したい」と思い、「自分から、どうしようか」と考え、「向上心」や「主体性」をもって各活動に取り組むことが課題である。そこで、様々な場面において、生徒が向上心をもち主体的に活動する中で、学びを深め、意欲を高めていきたいと考えた。この「向上心・主体性」は生徒たちに育みたい3つの資質・能力のうち「学びに向かう力、人間性等」の柱であるとともに、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」の根幹をなすものであると考える。以上のことから主体的に向上心をもって学び合い高め合っていく生徒の姿を目指し、本主題を設定した。

2 研究のねらい

協働的な学びの場において、タブレット端末や大型モニター等の ICT 機器を有効に活用することで、生徒が向上心をもち主体的に活動し、学びを深められるようにする。

3 具体的な取組内容

(1) 協働的な学習の場における ICT 機器の有効活用について

研究主題である「向上心をもって学び合い高め合う生徒の育成」にせまり学びを深めるためには、ICT 機器をグループ内や学級全体での考えを比較・検討するツールの一つとして活用することが重要となる。まず、個々の生徒が課題と向き合う場面において調べたり、考えをまとめたりするために、ICT 機器を有効に活用させる。そして、グループ内や学級全体で考えを比較検討するために、活用させることが重要であると考えた。

(2) 研究体制について

本校では、教師の年齢や担当教科、学年等の枠をこえてチームを編成し、様々な立場から意見交換や助言を得られるようにした。これにより、各教科の特性を生かしながら、ICT 機器の活用方法を考えたり、指導案を検討したりするようにした。

Google Jamboard を利用した授業後の研究協議では、授業者と同じチームの教員で参観し、教師の発問や取組に対して生徒がどのように反応したか、活動したか、ICT 機器の活用はどうであったかなどについて色分けした付箋に書き入れて共有し、多角的に検討し、成果や新たな課題を見出だすとともに、具体的な解決策を考えていった。

(3) 実践授業より

① 道徳

ア 本時のねらい

自分の行為が自分や他人にどのような結果をもたらすか深く考え、その結果に責任をもとうとする態度を育てる。

イ 協働的な学習における ICT 機器の活用と目的

- (ア) 大型モニターに、SNS の使い方に関するアンケート結果を提示することで、本時の題材を自分事としてとらえられるようにする。
- (イ) 自分の行いが自他にとってよい結果となるようにするためにはどのようなことを大切にしたらよいか考える場面では、班ごとに Google Jamboard を用いて話し合い活動を行うことで、考えをより深める。また、Google Jamboard に意見を書き出すことで、考えを可視化し、全体で共有できるようにする。
- (ウ) 本時の振り返りでは、ムーブノートに自分の考えを記入し、他者とも考えを共有することで、今後の人間関係の構築に必要なことを考えられるようにする。

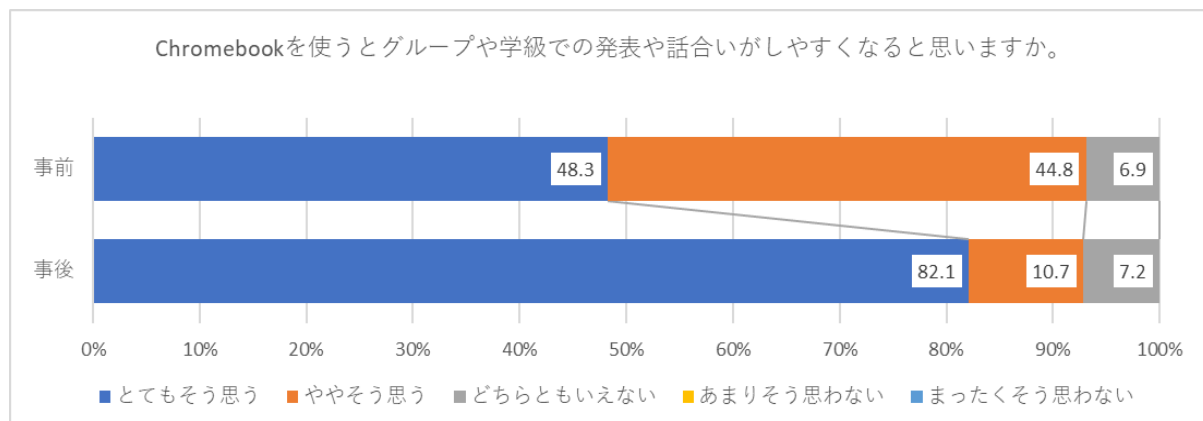
ウ 生徒の様子から

大型モニターや Google Jamboard を用いて、主発問をグループで考える場面において、内容を可視化・共有したことで発表や話し合いがしやすくなった(資料1)。

ICT 機器の活用により、生徒間において意欲的に話し合い活動が行われたり、発表をしたりすることで、他者と考え共有する姿が見られた。

資料 1

3年4組 33人(事前 29人, 事後 28人)



② 社会科

ア 本時の目標

アフリカ州の課題に対して、日本ができる支援について話し合う活動を通して、自分の考えをまとめる。

イ 協働的な学習における ICT 機器の活用と目的

- (ア) 学習課題をつかむ場面では、大型モニターを活用し、前時の内容を視覚的に再確認し、本時の学習に入ることができるようにする。
- (イ) アフリカ州の最重要課題を考える場面では、タブレット端末でスライドを活用しグループ内での発表をすることで、友達の考えを視覚的に聞き、比較・検討することで自分の考えを深化できるようにする。さらに、グループの考えを Google Jamboard にまとめ、大型モニターで共有することで、課題に対する考えを多面的に捉え、理解を深めることができるようにする。
- (ウ) 日本ができる支援について考える場面では、大型モニターを活用し、資料を映し出すことで、支援方法について考えることができるようにする。

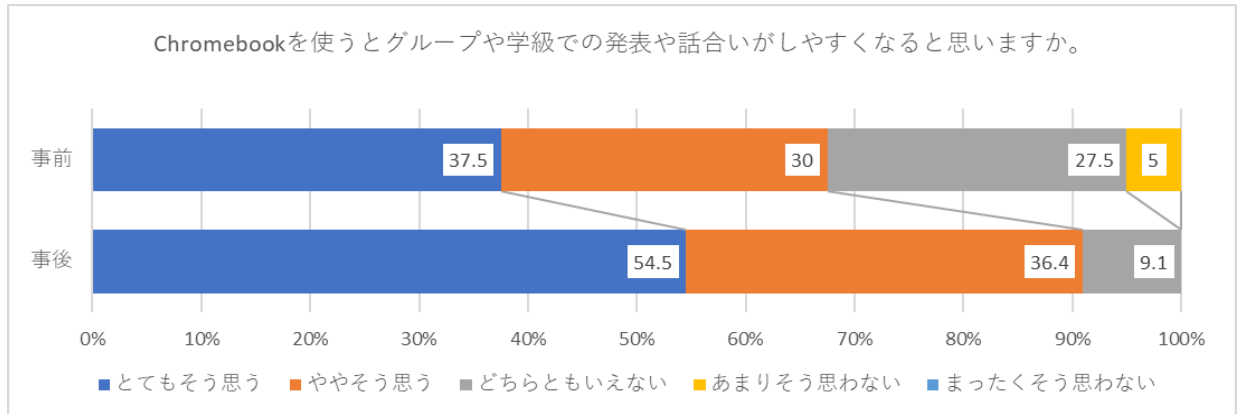
ウ 生徒の様子から

タブレット端末のスライド、Google Jamboard を活用することで、意見の比較・検討がしやすくなった(資料2)。

タブレット端末を活用したグループ内での発表では、スライドを使い、自分の考えを熱心に説明していた。また、比較・検討の場面では、互いの考えを伝え合いながら、課題に対する考えを多面的に捉えようとする姿が見られた。

資料2

1年2組 32人 (事前 32人, 事後 22人)



③ 英語科

ア 本時の目標

友達の話聞いて、必要な情報を捉えたりメモを取ったりしている。

イ 協働的な学習における ICT 機器の活用と目的

- (ア) Warm-up を行う場面で、生徒間の会話がより充実したものになるように、キーワードやフレーズを大型モニターに写し、会話のデモンストレーションを行う。
- (イ) ペアとのオンライン通話の場面では、Google Meet を使って、ペアの相手と通話ができるようにする。実際に起こりうる場面を設定して通話することで、相手意識をもち、正確な会話をしようとする意欲を高めることができる。
- (ウ) Google Forms に本時の振り返りを記録、蓄積し、学習課題と達成度を確認する。

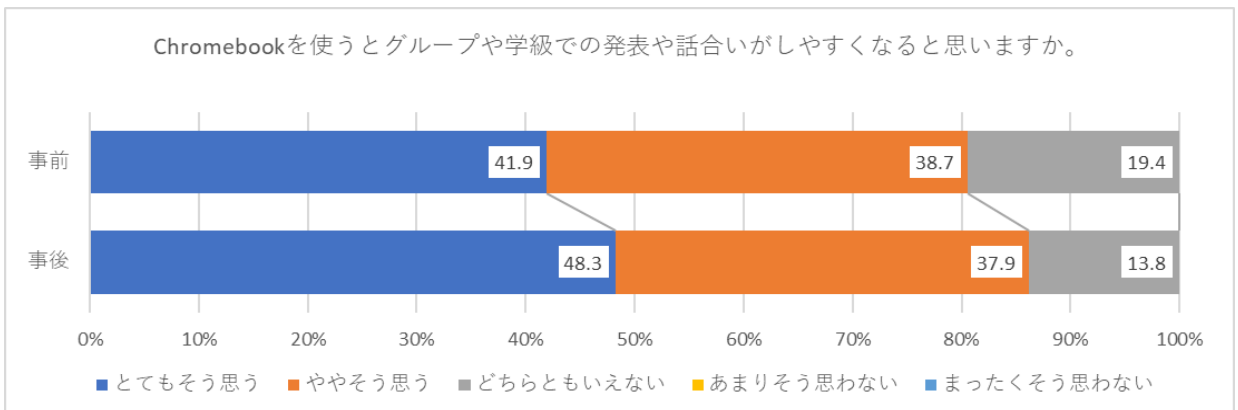
ウ 生徒の様子から

大型モニターを活用した Warm-up や Google Meet による実際に起こりうる場面を想定したオンライン通話を取り入れたことで、活動がよりしやすくなった(資料3)。

また、Google Meet によるオンライン通話を用いた活動では、相手意識をもち、互いに情報を伝え合おうとする意欲的なコミュニケーション活動が多く見られた。

資料3

1年3組 33人 (事前 31人, 事後 29人)



4 成果（進捗状況と今後の課題）

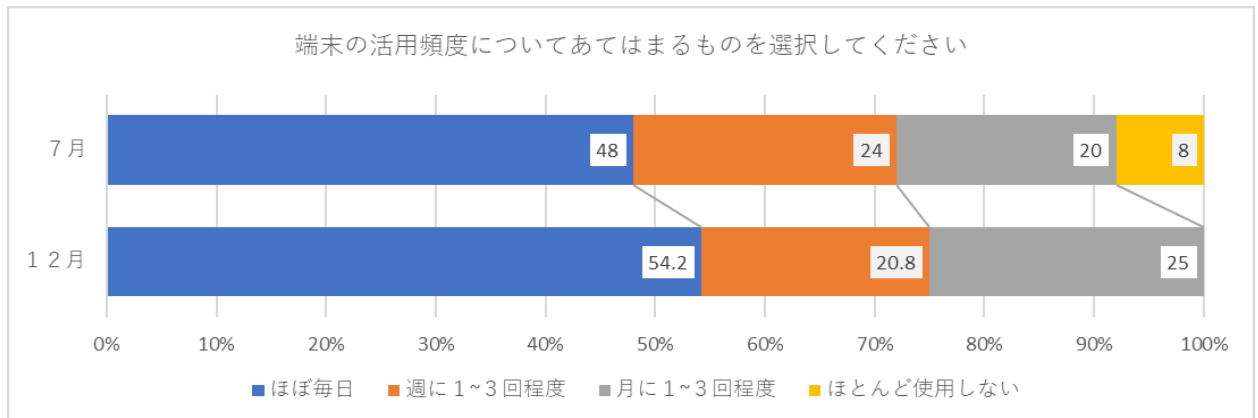
(1) 端末の活用について

① 教員（教科指導をしている教員）の取組から

教科の学習内容や特性などで ICT 機器の活用時期や活用頻度に変化があるものの、年間を通して各教科において活用頻度が高くなっている（資料 4）。具体的には、生徒がタブレット端末を活用する場面として、「個別に学習を進める場面」「グループで学び合う場面」「同じ課題について学級全体で話し合う場面」などがある。また、各教員が、授業での ICT 機器の活用方法を日々模索したり、相談したり、教員同士の授業参観をしたりすることで、様々な活用方法を身に付けることができた。

資料 4

教員 24 人（7 月 24 人，12 月 24 人）

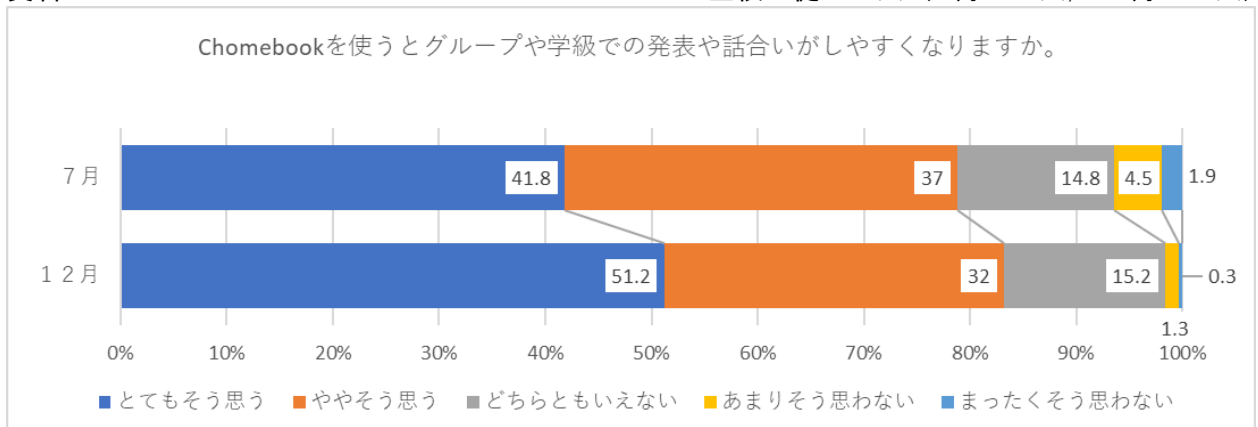


② 全校生徒の取り組みから

日常の授業を教員同士が参観し合うデイリー参観をした際には、各生徒が自分の考えをスライドにまとめ、説明し合ったり、Google Jamboard に記入した内容について話し合ったりするなど、意見交換や比較・検討に意欲的に取り組む姿が見られた。このことから、実践事例で取り上げた3教科の授業だけでなく、他教科の授業においても、タブレット端末を活用することでグループや学級での発表や話し合いがしやすくなり、個々の生徒の考えを深めるためにタブレット端末が有効活用されていると考えられる（資料 5）。

資料 5

全校生徒 372 人（7 月 297 人，12 月 311 人）



(2) 今後の課題

- ① 授業の内容や目的に応じ、黒板やホワイトボード、ICT 機器等のツールも使い分け、生徒の学びをより深めていく。
- ② ICT 機器を有効活用し、協働的な学びにおける対話や交流、討論等の質の向上を図っていく。
- ③ 個別最適な学びを実現するために学習形態を工夫したり、様々な授業展開を考えたりすることで、教員の授業力向上を図っていく。